ヴァチカン便り（64）

新たに 21 人の枢機卿が誕生

大ローマ布教所長
山口　英雄　*Hideo Yamaguchi*

世界中から 21 人の枢機卿が誕生

法王フランチェスコ１世は、在任 10 年目で９回目となる新しい枢機卿の任命を行った。任命を受けたのは 21 名で、７月９日に発表された。新枢機卿の多くは意外な国々から選ばれている。そのため、次期法王を決めるコンクラーベの動きがますます混沌としてきた。

現在、法王を選ぶ権利を有し、コンクラーベに参加できるのは 137 人となった。今回任命された枢機卿の中で、ヴァチカンのあるイタリアから選ばれたのはわずか３名だけだった。それも知名度の低い人たちだった。他のヨーロッパ地域からは７名だ。内訳は、スペイン４名、フランス１名、スイス１名、ポーランド１名である。南北アメリカからは６名である。内訳は、アルゼンチン３名、コロンビア１名、ヴェネズエラ１名、アメリカ合衆国１名。アフリカからは、南アフリカ１名、タンザニア１名、南スーダン１名であり、アジアからは中国（香港）１名、マレーシア１名である。とりわけ意外だったのは、今回任名されるだろうと思われていたイタリアのミラノ大司教、またウクライナのキーウ大司教が任命されなかったことだった。なお、中国（香港）のチョウ・サウヤン（Chow Sau-Yann）の任命は、中国との関係重視を内外に知らせるためと見られている。

ポルトガルでの「世界青年の日」大会に出席

２年に一度開かれるカトリック「世界青年の日」大会が、ポルトガルのリスボンで開かれ、法王もこれに出席した。大会には世界から 150 万人もの若者が集まった。法王は８月５日、予定には入っていなかったファティマを訪問した。リスボンからヘリコプターでファティマの聖母入りし、聖母マリア像の前で長い間祈り続けた。ファティマは 1917 年５月 13 日に３人の姉妹の前に現れたと伝えられる。昨年ロシアがウクライナに侵攻するや、直ちに聖母マリアに平和の祈りを祈願したことが思い出された。侵攻の１カ月後、「母よ、私たちを戦争から解放し、核戦争の危機から守ってください」と祈ったのだった。ファティマ訪問の後、法王はリスボンに戻り、100 万人の若者たちに話をした。その中には、ローマ法王の特使としてウクライナ、ロシア、アメリカを訪れた枢機卿ズッピの姿もあった。近い将来、法王は彼を中国にも派遣することだろう。

法王は８月６日にローマに戻ったが、帰国の飛行機内で恒例の記者会見が行われた。一番の問題は法王の健康問題についてだった。手術後まだ間もないこともあり、講話が予定より短くなったことに対して、法王は次のように答えた。「私の健康状態は大変いいんです。抜糸も済み、普通の生活をしていますよ。一昨日、教会での話を途中で打ち切ったが、それは照明が暗くて原稿がよく見えなかったので話を短くしました。それに、若者は長い時間、注意力を深く保てません。本当に気持ちを集中できるのは、たったの８分と聞いています。彼らのためにも話を短くしたのです。そういう情愛も示さないといけないと思っています。」

ファティマでは、言葉を口に出して聖母マリアに語りかけていなかったという質問に対しては、こう答えた。「私はとにかくマリアにすべてを祈りました。さらに平和のためにも。我々は平和のためにくどいぐらいに祈らねばなりません。」

法王は近いうちにマルセイユに行くが、フランスに行くとは言っていない。そこでフランスに対して何か悪い思い出があるのかという質問に対しては、次のように述べている。「私は地中海の問題を大事にしています。難民問題における犯罪があります。それはヨーロッパにあるのではなくて、北アフリカにある強制収容所のことです。地中海沿岸にいる神父たちは、彼らを助けるべく苦慮しています。今、地中海は墓場となっていて、その中心が北アフリカです。」

この 70 年間に、ポルトガルでは神父たちによる小児性愛症事件が 4,800 件もあったようだが、それをどう思うかという質問については、こう答えた。「私はリスボンでこの被害者たちに会いました。それは痛ましい事件です。しっかり解決しなければいけないと思っています。」

教会ではすべての人が皆同じ権利を持っているはずなのに、同性愛の人などが秘蹟を受けるとき疎外されている。これに対してどう思うかという質問には、こう答えた。「教会の中では皆平等です。秘蹟を受けないというのは教会に関係なく、むしろ個人の問題ではないでしょうか。」

高齢者を大事にするよう警告

法王は、高齢者を大事に扱うように、再三警告している。というのも、イタリアは EU 諸国の中で高齢者福祉が一番遅れているからである。

法王はさる７月 23 日に、第３回「祖父母と高齢者のための世界祈願日」を祝してミサを行った。現在 86 歳の法王にとっては、大事な問題の一つだ。「生産力のない世代」の高齢者は「就業前の若き子供たち」とは同じではないと言う。

イタリアは日本と同様に高齢社会であり、また日本同様に新時代を形成するであろう子供の出生率も低い。高齢者を大事にしようという動きは、前首相ドラーギ、そして現首相メローニによって、社会制度の改革に見ることができる。ただ、予算の配分を待たねばならない。EU 内で福祉のための法整備がなされたのはドイツの 1995 年が最初だ。イタリアとよく似たスペインでも 2006 年には法的に整備された。

現在イタリアでは、約 380 万人の高齢者が自分で行動することができなくなっている。そして、2030 年には 440 万人が、2050 年には 540 万人がそうなるだろうと見られている。現在 21.5％の人がホームヘルパーの世話になっている。しかし１人あたりで見ると、その割合はきわめて低い。

高齢者全体の 45.6％は、家族の介護を受けている。介護の担い手の 71％が女性である。ドラーギ首相の時代に、福祉制度の改革が行われたが、まだ予算措置が明確でない。現在、見込まれる予算としては、年間 50 億ユーロから 70 億ユーロである。政治的には優先されるべき課題である。

「誰もが歳を取るということを決して忘れてはいけません。歳を取ることもまた、神の恩寵なのです。高齢者のおかげで現在があるのです。」法王はそのように述べて、高齢者を大事にすることを強調した。